

2026. 8. 7

TOYOBO
Beyond Horizons

2026年度 第1四半期 決算説明

東洋紡株式会社
執行役員 CFO 管理部門統括
高橋 秀和

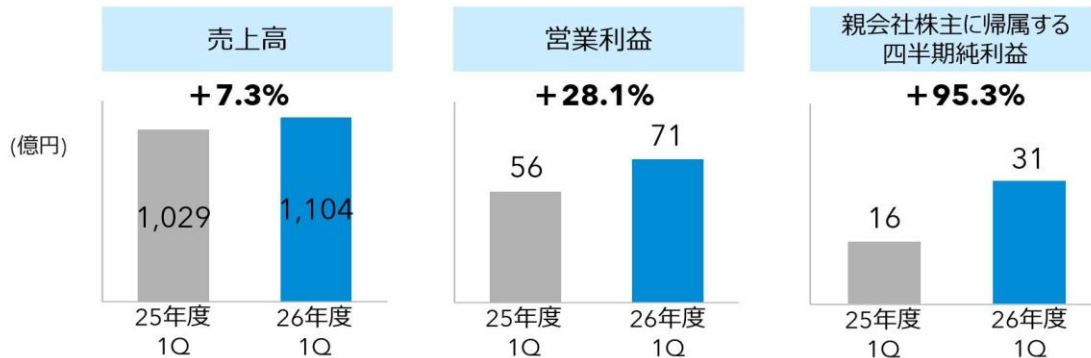
おはようございます。本日はお忙しい中、当社の決算説明会にご参加いただき、誠にありがとうございます。それでは資料に沿いまして、2026 年度第 1 四半期の決算説明を行います。

決算のポイント

TOYOBO

第1四半期 実績

中東情勢悪化の影響を受けるも、工業用フィルム、樹脂・ケミカルが堅調に推移し、増収増益。
営業利益は 71 億円、四半期純利益は 31 億円



2027年3月期 通期予想

工業用フィルムは堅調持続も、減価償却費の増加、中東向け販売の減少、原燃料コスト影響により、増収減益。営業利益 230 億円、当期純利益 70 億円、配当は一株あたり 40 円を予想

2

決算のポイントです。当第1四半期実績ですが、中東情勢の悪化を受け、中東向け製品の販売減の影響がありましたが、工業用フィルムや樹脂・ケミカルの販売が堅調に推移しました。その結果、売上高は前年同期比 7.3% 増の 1,104 億円、営業利益は 28% 増の 71 億円、四半期純利益は 95% 増の 31 億円となり、増収増益となりました。

次に、通期の業績予想です。5月の段階では、中東情勢による事業への影響が不透明であったため、業績予想の公表を見送りました。今回、現時点での情報をもとに改めて算定いたしました。

工業用フィルムは堅調を維持するものの、新設備稼働による減価償却費の増加、中東向け製品の販売減、さらに原燃料コストの影響などを織り込み、通期予想は営業利益 230 億円、当期純利益 70 億円といたします。また、配当予想は 1 株当たり 40 円といたします。

決算サマリー | PL

TOYOBO

	25年度 1Q	26年度 1Q	増 減		(億円)
			金 額	率	
売上高	1,029	1,104	+75	+7.3%	
売上総利益	252	274	+22	+8.7%	
(率)	24.5%	24.8%	-	-	
営業利益	56	71	+16	+28.1%	
(率)	5.4%	6.5%	-	-	
営業外損益	▲ 13	▲ 5	+8	-	
経常利益	43	66	+24	+55.3%	
特別損益	▲ 13	▲ 9	+4	-	
親会社株主に帰属する 四半期純利益	16	31	+15	+95.3%	
EBITDA*	114	141	+27	+23.3%	* 営業利益 + 減価償却費 (のれんを含む)
EPS (円)	17.8	34.8	-	-	
減価償却費	59	70	+11	+18.8%	
設備投資	66	50	▲ 17	▲ 25.1%	
研究開発費	35	36	+1	+3.3%	

3

決算サマリーの PL です。

売上総利益は前年同期比で 22 億円の増加となり、粗利率は前年同期並みとなりました。営業利益は 16 億円の増加となりました。営業外損益は、為替差損益などがプラスに働き、経常利益は 24 億円増の 66 億円、当期純利益は 15 億円増の 31 億円となりました。

減価償却費は、フィルムやライフサイエンスでの新設備の稼働に伴い、前年同期比 11 億円増の 70 億円となりました。一方で、設備投資は 50 億円となり、減価償却費を下回る水準で推移しました。

営業外損益・特別損益

TOYOB0

営業外損益 内訳 (億円)

	25年度 1Q	26年度 1Q	増 減
受取配当金	1	1	▲ 1
為替差益	-	0	+0
その他	6	7	+1
営業外収益 計	7	8	+1
支払利息	7	8	+1
為替差損	4	-	▲ 4
その他	9	5	▲ 4
営業外費用 計	20	13	▲ 7
営業外損益 計	▲ 13	▲ 5	+8

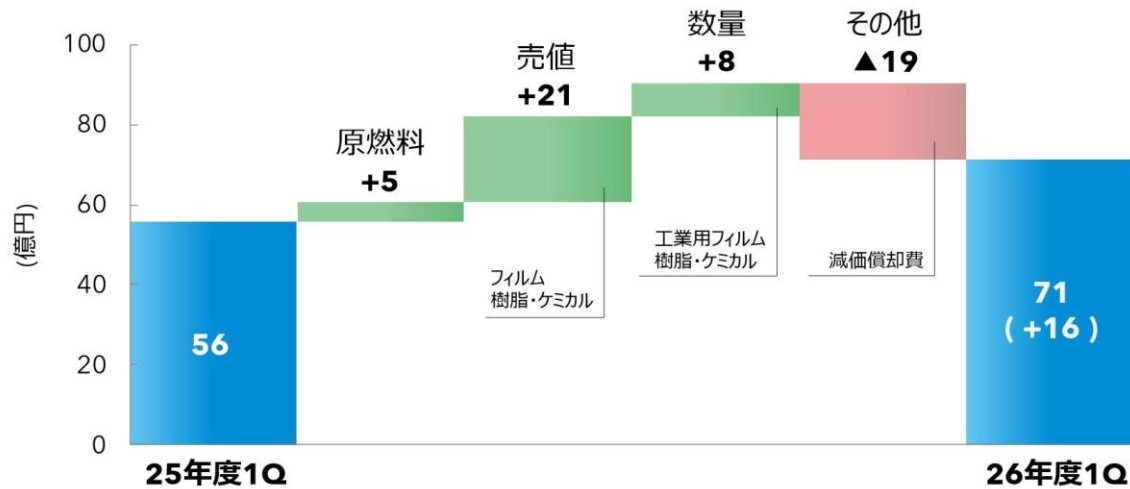
特別損益 内訳 (億円)

	25年度 1Q	26年度 1Q	増 減
特別利益 計	-	-	-
減損損失	-	2	+2
固定資産処分損	3	2	▲ 2
投資有価証券評価損	-	4	+4
事業構造改善費用	-	1	+1
退職給付制度改定損	9	-	▲ 9
特別損失 計	13	9	▲ 4
特別損益 計	▲ 13	▲ 9	+4

営業外損益および特別損益の内訳です。内容は記載の通りですので、適宜ご参照ください。

営業利益の増減要因

TOYOBO



	25年度				26年度
	1Q	2Q	3Q	4Q	1Q
為替レート (円/US\$)	144	147	154	157	160
国産ナフサ (千円/kl)	65	64	66	67	119

5

営業利益の増減要因です。

まず、国産ナフサ価格ですが、この第1四半期は中東情勢の影響を受け、11万9,000円/klとなりました。前四半期と比較して、大幅な上昇となりました。

過去の実績から、国産ナフサ価格の変動による営業利益へのインパクトは、1,000円の変動につき年間3億円と試算しています。今回の上昇により、40億円程度の利益押し下げ要因が生じています。ただし、当社の棚卸資産の在庫月数は4.6カ月分ですので、売上原価へ影響するまでには、半年程度のタイムラグがあります。

そのため、この第1四半期は、前期末から引き継いだ在庫の影響により、+5億円となりました。言い換えると、先ほど申し上げた国産ナフサ価格高騰による押し下げ影響は、第2四半期以降に持ち越されます。

次に、売値については、原燃料価格の高騰を受けた価格改定を進めた結果、+21億円となりました。

数量は、中東情勢緊迫化の影響から、海水淡水化用のRO膜、中東向け特化生地のトープ地の販売が減少しました。

一方で、工業用フィルムや樹脂・ケミカルは、電子材料向けやAIサーバー向けの需要が堅調に推移しました。その結果、差し引きで+8億円となりました。

その他は、新設備稼働に伴う減価償却費の増加11億円に、中東情勢の影響による一部ラインの操業損などが加わり、△19億円となりました。

決算サマリー | BS

TOYOB0

	(B)		(A)	(億円)
	25/3末	26/3末	26/6末	増 減 (A)-(B)
総資産	6,178	6,277	6,207	▲ 70
現預金	286	311	298	▲ 13
売上債権	1,062	1,017	994	▲ 23
棚卸資産	1,190	1,281	1,286	+5
有形固定資産	2,965	2,999	2,978	▲ 22
純資産	2,320	2,520	2,503	▲ 16
自己資本	1,953	2,133	2,131	▲ 2
うち利益剰余金	690	762	758	▲ 5
非支配株主持分	367	387	373	▲ 14
有利子負債	2,679	2,610	2,622	+12
D/E レシオ	1.37	1.22	1.23	-
D/E レシオ（資本性調整後）*	1.15	1.03	1.04	-

* 劣後ローンおよび劣後債資本性調整後のD/E レシオ

6

決算サマリーの BS です。

前期末比で売上債権が減少した他、有形固定資産は、減価償却費が設備投資を上回ったことなどから減少し、総資産は 70 億円の減少となりました。フリー・キャッシュ・フローはプラスを確保しましたが、第 1 四半期は配当金の支払いなどがあったため、有利子負債は 12 億円増加し、D/E レシオはほぼ横ばいの 1.23 倍となりました。

決算サマリー | セグメント別

TOYOB0

(億円)

	売上高		営業利益		
	25年度 1Q	26年度 1Q	25年度 1Q	26年度 1Q	増 減
フィルム	446	485	40	52	+12
ライフサイエンス	80	91	2	▲ 5	▲ 6
環境・機能材	254	288	15	28	+13
繊維	196	188	▲ 1	▲ 4	▲ 3
不動産・その他	53	51	7	6	▲ 1
消去・全社	-	-	▲ 7	▲ 6	+1
合計	1,029	1,104	56	71	+16

26年度より報告セグメントの区分を以下の通りに変更。25年度は変更後の区分に基づき組み替えた数字で記載

- ・「機能繊維・商事」の名称を「繊維」へ変更
- ・「機能繊維・商事」に含まれていた一部事業を「その他」へ変更

7

セグメント別のサマリーです。

当期より報告セグメントの変更を行っています。これは、当期首に、商事子会社である東洋紡STCを東洋紡本体へ吸収合併したことに伴い、事業管理区分の見直しを行ったためです。具体的には、旧機能繊維・商事セグメントを繊維セグメントへ名称変更するとともに、海外子会社における商事関連の一部ノンコア事業を、その他セグメントへ移管しています。

各セグメントの業績動向について、前年同期比で増益となったのが、フィルムと環境・機能材です。AIサーバー向けや電子材料向けが好調だったことに加え、お客様側で在庫を確保する動きも見られました。

一方で、ライフサイエンスは、新設備の減価償却費の先行などが影響し、繊維は中東情勢の影響などを受け、減益となりました。

	25年度	26年度	増減		(億円)
	1Q	1Q	金額	率	
売上高	446	485	+40	+8.9%	
営業利益	40	52	+12	+29.0%	
(率)	9.0%	10.7%	-	-	
EBITDA	65	82	+17	+26.7%	

包装用フィルム

- 原燃料価格高騰や調達リスクの高まりが懸念されるなか、
販売面での見直し、生産性改善により、影響は一部にとどまる

工業用フィルム

- 液晶偏光子保護フィルムは、堅調に推移
- セラミックコンデンサ用離型フィルムは、AIサーバー向けを中心に販売が拡大

フィルムです。

包装用フィルムは、原燃料価格の高騰に伴う販売価格の見直しや、一部原料の調達懸念がありましたが、お客様の在庫確保の動きにしっかりと対応した結果、下振れ影響は一部にとどめることができました。

工業用フィルムは、宇都宮工場の新設備稼働による減価償却費の増加があったものの、ディスプレイ用途のフィルムが堅調に推移しました。また、セラミックコンデンサ用離型フィルムは、AIサーバー向けの需要増加に伴い販売が拡大しました。

これらにより、フィルム全体としては、増収増益となりました。

	25年度	26年度	増減		(億円)
	1Q	1Q	金額	率	
売上高	80	91	+11	+13.4%	
営業利益	2	▲ 5	▲ 6	-	
(率)	2.0%	-	-	-	
EBITDA	11	7	▲ 4	▲ 33.2%	

バイオ

- 診断薬用および遺伝子検査試薬用の原料酵素は、海外向けの販売が堅調に推移

メディカル

- 人工腎臓用中空糸膜は、販売は堅調に推移も、原燃料価格高騰の影響あり

医薬

- 事業環境の変化や設備更新に伴う対応などにより、販売が減少

ライフサイエンスです。

バイオは、中国市場が競争激化に直面しているものの、欧米向けで在庫確保の動きがあり、当第1四半期は堅調に推移しました。

メディカルは、引き続き需要は堅調であったものの、一部価格転嫁が難しい製品もあり、原燃料価格高騰の影響を受けました。

医薬は、新設備の更新に伴い、この第1四半期は減価償却費が先行しました。期の後半の受託案件獲得に向けて注力していますが、この第1四半期は苦戦しました。

以上の結果、ライフサイエンス全体としては増収減益となりました。

	25年度	26年度	増減		(億円)
	1Q	1Q	金額	率	
売上高	254	288	+34	+13.5%	
営業利益	15	28	+13	+90.2%	
(率)	5.8%	9.6%	-	-	
EBITDA	26	41	+15	+59.6%	

樹脂・ケミカル

- エンジニアリングプラスチックは、自動車用途を中心に販売が増加し、収益が改善
- 工業用接着剤“バイロン”は、海外向け電子材料用途の販売が堅調に推移

環境・ファイバー

- 海水淡水化用逆浸透膜（RO膜）は、中東情勢悪化の影響により、販売減少
- 高機能ファイバーは、“ザイロン”の需要回復を受けて、販売が増加
- 不織布マテリアルは、スパンボンド不織布が建材用途を中心に回復、収益性が改善

10

環境・機能材です。こちらは主に、東洋紡エムシーの事業領域となります。

樹脂・ケミカルは、自動車用途や電子材料用途において、各素材とも販売が堅調に推移しました。

環境・ファイバーは、海水淡水化用 RO 膜は中東情勢の影響により、販売減と操業損があり苦戦しました。一方で、高機能ファイバーや不織布マテリアルには、需要の回復が見られました。

以上の結果、環境・機能材全体としては増収増益となりました。

	25年度	26年度	増減		(億円)
	1Q	1Q	金額	率	
売上高	196	188	▲ 8	▲ 4.1%	
営業利益	▲ 1	▲ 4	▲ 3	-	
(率)	-	-	-	-	
EBITDA	5	3	▲ 2	▲ 40.1%	

衣料繊維

- 中東向け特化生地は、中東情勢悪化に伴う販売減少とコストアップにより、収益性が大きく低下

エアバッグ用基布

- 生産効率の向上および海外拠点の集約を進め、収益性が改善

繊維です。衣料繊維は、中東向け特化生地であるトープ地が中東情勢緊迫による販売減と操業損により、収益が大幅に低下しました。

エアバッグ用基布は、事業再編の一環としてタイ拠点への集約を進めています。

以上の結果、繊維全体としては減収減益となりました。

2026年度の事業環境見通し

TOYOBO

セグメント	事業	見通し
フィルム	包装用	前年度並みも、後半やや減速
	工業用	液晶偏光子保護フィルムは堅調な需要が継続 MLCCはAIサーバー関連需要を中心に拡大
ライフサイエンス	バイオ	欧米向け堅調も、中国での競争激化
	メディカル	人工腎臓用中空糸膜は国内外の需要堅調
環境・機能材	樹脂・ケミカル	自動車向けは地域差あるも需要は堅調 電子材料向けは国内外で需要堅調
		海水淡水化用逆浸透膜（RO膜）は中東情勢の影響あり（輸送、商談） 不織布マテリアルは前年度並みの需要を想定
	環境・ファイバー	
繊維	衣料繊維	中東向け特化生地は中東情勢の影響あり（出荷減少等）
	エアバッグ	自動車向けは地域差あるも需要は堅調
共通		国産ナフサ価格は後半低下を想定も、中東動向次第

12

26年度の事業環境見通しのまとめです。

中東情勢緊迫化の影響が直接販売に及んでいる環境・ファイバーのRO膜、および衣料繊維は、引き続き影響を受けると見えています。

包装用フィルムは、第1四半期は在庫確保に向けた動きがありましたが、全体としては前年度並みの需要を想定しており、後半はやや減速すると見えています。工業用フィルムでは、液晶偏光子保護フィルムで、前年度に引き続き堅調な需要が継続しています。セラコン用離型フィルムは、AIサーバー関連需要を中心に需要が拡大しています。

ライフサイエンスでは、バイオが中国市場の競争激化の影響を受けているものの、欧米向けは堅調です。人工腎臓用中空糸膜も需要は堅調です。

樹脂・ケミカルでは、電子材料向けで需要は堅調です。また、自動車向けの樹脂・ケミカルやエアバッグは、地域差はあるものの、需要は堅調と見えています。

2026年度 業績見通し

TOYOB0

工業用フィルムは堅調持続も、減価償却費の増加、中東向け販売の減少、原燃料コスト影響により、増収減益。営業利益 230 億円、当期純利益 70 億円、配当は一株あたり 40 円を予想

	25年度	26年度	増 減		(億円)
	実績	見通し	金 額	率	
売上高	4,216	4,350	+134	+3.2%	
営業利益	279	230	▲ 49	▲ 17.6%	
(率)	6.6%	5.3%	-	-	
経常利益	229	185	▲ 44	▲ 19.1%	
特別損益	▲ 35	▲ 40	▲ 5	-	
親会社株主に帰属する 当期純利益	112	70	▲ 42	▲ 37.4%	
EBITDA	525	515	▲ 10	▲ 2.0%	
EPS (円)	126.7	79.3	-	-	
減価償却費	246	285	+39	+15.7%	
設備投資	290	225	▲ 65	▲ 22.5%	
研究開発費	141	150	+9	+6.3%	

13

これらを踏まえた 26 年度の通期業績見通しです。

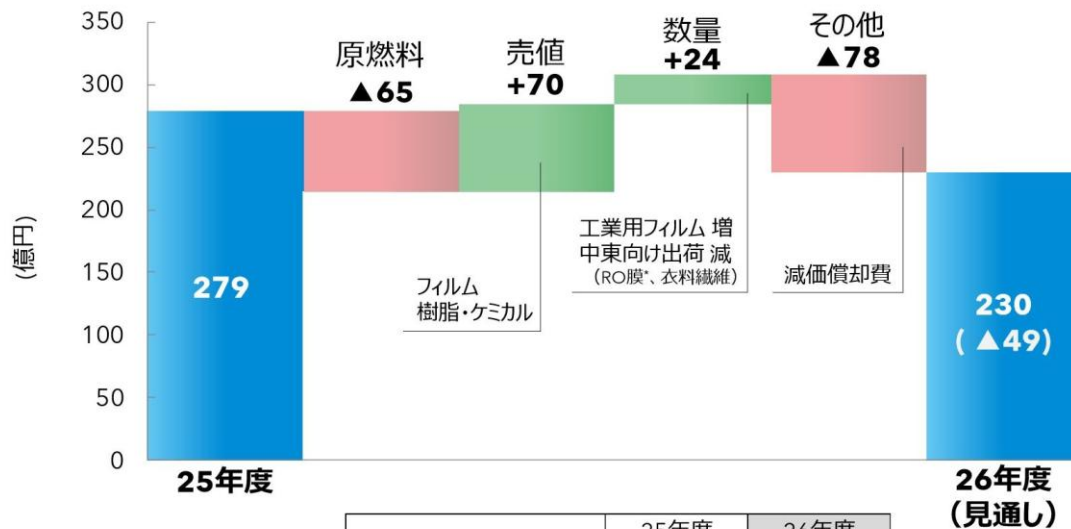
工業用フィルムなどは、堅調を維持するものの、新設備の稼働により減価償却費の負担が先行します。減価償却費は、前年度比で 39 億円増加する見込みです。

さらに、RO 膜やトープ地など、中東向けの製品の販売減少、および原燃料コストの影響を織り込み、通期業績予想は営業利益 230 億円、当期純利益 70 億円の増収減益とします。

また、配当予想については、安定的な配当維持を勘案し、1 株当たり 40 円を予定しています。

営業利益の増減要因

TOYOBO



	25年度	26年度
為替レート (円/US\$)	151	161
国産ナフサ (千円/kl)	65	91

*海水淡水化用逆浸透膜

14

通期営業利益の増減要因分析です。

原燃料価格は、国産ナフサ価格は依然不透明な状況にあり、足元は9万8,000円/kl程度で推移しています。中東情勢の動向次第ではありますが、後半に向けて緩やかに低下し、通期平均では9万1,000円/klとなると見えています。

過去実績に基づくと、国産ナフサ価格1,000円の変動に対して営業利益へのインパクトは年間3億円となります。こちらで年間90億円のインパクトとなります。ただし、先ほど申し上げました棚卸資産の在庫月数によるタイムラグを勘案しますと、当期の実績に与える影響額は、△65億円となります。

この原燃料コストの上昇相当分を価格政策へと反映し、さらに輸出製品における円安効果も含め、売値は+70億円と見込んでいます。

数量は、中東向けの販売減はあるものの、工業用フィルムを中心にAIサーバーや電子材料分野での需要増加を捉え、+24億円を見込みます。

その他として、新設備稼働に伴う減価償却費の増額分である39億円に、中東情勢の影響による一部ラインの操業損などを合わせ、△78億円を見込んでいます。

以上の結果、通期営業利益は、前年度比で49億円減の230億円を見込んでいます。

セグメント別見通し

TOYOBO

売上高	25年度 実績*			26年度 見通し			通期 増減
	上期	下期	通期	上期	下期	通期	
フィルム	865	886	1,752	990	860	1,850	+98
ライフサイエンス	165	180	345	180	210	390	+45
環境・機能材	507	594	1,101	550	600	1,150	+49
繊維	399	406	805	365	385	750	▲ 55
不動産・その他	103	110	213	105	105	210	▲ 3
消去・全社	-	-	-	-	-	-	-
合計	2,040	2,175	4,216	2,190	2,160	4,350	+134

営業利益	25年度 実績*			26年度 見通し			通期 増減
	上期	下期	通期	上期	下期	通期	
フィルム	86	80	166	90	50	140	▲ 26
ライフサイエンス	1	▲ 1	1	▲ 3	4	1	+0
環境・機能材	31	66	97	45	52	97	▲ 0
繊維	▲ 0	10	9	▲ 7	8	1	▲ 8
不動産・その他	15	21	35	10	11	21	▲ 14
消去・全社	▲ 15	▲ 15	▲ 29	▲ 15	▲ 15	▲ 30	▲ 1
合計	118	161	279	120	110	230	▲ 49

* 新セグメントでの25年度 上期、下期および通期実績は、監査前の暫定値です。今後、変更になる可能性があります。

15

セグメント別の通期見通しです。

フィルムは、価格改定の効果が寄与します。また、販売数量面では、包装用フィルムが後半にかけて減速するものの、工業用フィルムはセラコン用離型フィルムなどの販売が拡大し、売上高は前年度比で増収となる見通しです。一方で、営業利益は、宇都宮工場の新設備の稼働に伴う減価償却費が先行すること、また、原燃料コストの負担が第2四半期以降顕在化することから、前年度比で減益を見込んでいます。

ライフサイエンスは、メディカルや医薬の設備稼働により、上期は減価償却費が先行します。しかし、大館工場での生産性向上やバイオにおける原料酵素の精製プロセス増強、さらには医薬事業での受託案件獲得により、下期に向かって回復する予定です。

環境・機能材は、中東向けRO膜の販売減少はあるものの、価格改定の効果に加え、樹脂・ケミカルなど引き続き堅調に推移することから、売上高は前年度比で増収を予想しています。営業利益は、原燃料コストの影響が、第2四半期以降顕在化することを想定しています。

繊維は、中東情勢の影響が残るものの、期末に向けた荷動きの正常化やエアバッグの構造改善効果により、下期からの持ち直しを想定しています。

26年度は、フィルムおよびライフサイエンスでの新設備の稼働に伴い、減価償却費の増加が先行する展開となります。そこに、中東情勢の緊迫化による一過性の業績悪化が重なります。一方で、生産性の改善への取り組みは着実に進んでおり、AIサーバーやディスプレイを含む電子材料分野、およびバイオ、メディカル分野の需要は、大変底堅いと考えています。

株主・投資家の皆様のご期待に応えるべく、今期通期見通しである営業利益230億円、こちらは着実にクリアし、さらなる上を目指していきたいと考えています。

そのためには、本年度の経営方針である五つの施策、すなわち「安全・防災、品質、コンプライアンスの徹底」「投資成果の実現」「価値に見合ったプライシングの徹底」「資産効率改善」、そ

して「投資・経費の絞り込み+TX 具体化、コストダウン」、これらを愚直に実行し、ワンチーム経営で取り組んでまいります。

以上をもちまして、2026 年度第 1 四半期決算の説明を終わります。ご清聴ありがとうございました。

補足

16

セグメント別情報

売上高	25年度*					26年度
	1Q	2Q	3Q	4Q	通期	1Q
フィルム	446	419	435	451	1,752	485
ライフサイエンス	80	85	83	97	345	91
環境・機能材	254	253	272	322	1,101	288
繊維	196	203	197	209	805	188
不動産・その他	53	50	49	61	213	51
消去・全社	-	-	-	-	-	-
合計	1,029	1,011	1,035	1,140	4,216	1,104
営業利益	25年度*					26年度
	1Q	2Q	3Q	4Q	通期	1Q
フィルム	40	46	42	38	166	52
ライフサイエンス	2	▲ 0	▲ 4	3	1	▲ 5
環境・機能材	15	16	23	44	97	28
繊維	▲ 1	0	4	6	9	▲ 4
不動産・その他	7	7	8	13	35	6
消去・全社	▲ 7	▲ 8	▲ 8	▲ 7	▲ 29	▲ 6
合計	56	62	65	96	279	71

(億円)

* 新セグメントでの25年度 2Q~4Qおよび通期実績は、監査前の暫定値です。今後、変更になる可能性があります。

17

本資料中の見通しや目標等、将来に関する記載事項は、本資料作成時点において入手可能な情報に基づいて作成したものであり、実際の業績等は、今後の種々の要因によって、本資料の記載事項と異なる場合がありますことをご了承ください。

東洋紡株式会社

All Rights Reserved

18

